

29. 高血圧性脳出血非手術例に対する高気圧酸素療法の適応と効果

山口真澄 上村孝臣 小松俊一
(朝霞厚生病院附属上村脳疾患研究所脳神経外科)

【目的】当院では、高血圧性脳出血のうち、以下の条件に合う症例については、意識レベルおよび神経症状の早期回復を目的とし、高気圧酸素療法(OHP)を行っている。すなわち、1)あらゆる型の非手術例の高血圧性脳出血で、意識障害は軽度のもので、2)発症後6時間と翌日のCTで血腫の増大のないもので、3)OHPを1~2回行い、症状の悪化やOHPの副作用(気圧障害など)のないもので、4)副鼻腔炎、中耳炎等の耳鼻科的疾患、上気道炎や肺炎の合併のないもので、である。

【方法】当院のOHPは第1種のone man chamberで、100% O₂下2気圧で60分間を1回とし、計20回行う。効果判定のパラメーターとして、初回、10回、20回にABG, EEG, dynamic CTを施行した。効果判定は、10回以内で効果があれば著効、20回以内で効果があれば有効、その他を不変、無効とした。

【結果】症例は41例(被殻出血16, 視床出血11, 小脳出血5, 尾状核頭部出血3, 橋出血2, 皮質下2, その他2)で、著効15, 有効16, 不変2, 中止8であった。中止例のうち、1例は、経過中、血腫の増大のため、血腫除去術を行った。その他は、OHPタンク内での体動、鼓膜炎、肺炎、酸素中毒様症例、狭心症のため中止した。

【結論】1)高血圧性脳出血非手術例41例のうち、31例につき、有効以上の結果が得られた(有効率75.6%)。特に、軽症意識障害に対する効果は良好であった。2)OHPによりCT上の脳出血のHDAの吸収速度および、脳出血のまわりのLDA(penumbra)の消失速度が促進された。3)CT値の検討のみでは判りにくいLDAにつき、dynamic CTで動的に検討すると、wash outが正常に近い場合がpenumbraと考えられた。

30. 急性期脳卒中への高圧酸素療法の効果—臨床症状(ADL)及び病巣の大きさを中心として—

大島光子*1)*2) 八木博司*1) 佐渡島省三*2)
上田一雄*3) 梁井俊郎*2) 藤島正敏*2)

*1)福岡八木厚生会病院
*2)九州大学医学部第2内科
*3)九州大学医療技術短期大学部

脳卒中に関する高圧酸素療法(以下OHP)の効果はまだ一定の見解は得られていない。我々は今回、その効果を臨床症状及び病巣の大きさを中心に検討したので報告する。

【対象と方法】対象は、当院に頭部CT scanが導入された昭和58年~60年までの脳卒中入院患者77名のうち、発症より1ヶ月以内にOHPを開始し、10回以上施行した43名とした。男性27例、女性16例。平均年齢は66.0才。脳梗塞37例、脳出血6例、くも膜下出血1例である。

OHPは2絶対気圧下で純酸素を投与し、1回を90分とした。臨床症状はADLを中心に考え、意識障害、言語障害、上肢及び下肢運動障害の4項目について、4段階に評価し、1項目4点を正常、総合正常を16点とした。病巣の大きさは、発症1ヶ月以内の頭部CT scanを用い、Infarction Index (I. I.) $\frac{\text{最大病巣面積}}{\text{最大病巣部を含む大脳半球面積}} \times 100 (\%)$ として求めた。臨床症状の評価はOHP直前、10回後、20回後に行った。

【結果】OHP平均回数19.1回、発症よりの平均病日はOHP1回目5.7病日、10回目17.4病日、20回目30.5病日であった。臨床症状の改善は意識障害10/17(58.8%)、言語障害16/27(59.3%)、上肢運動障害13/29(44.8%)、下肢運動障害15/31(48.3%)であった。OHP直前の総合臨床評価をI群16~13点、II群12~7点、III群6点以下とすると、I群はOHP10回、II群は20回でほぼ全例ADLは自立し、III群では経時的改善は認められず、死亡又は寝たきりの状態であった。I. I. はI群 $3.43 \pm 1.25\%$ 、II群 $8.07 \pm 2.40\%$ 、III群 $25.8 \pm 8.04\%$ (M±SE)でI、II群とIII群間でP<0.01の有意差を認めた。

【まとめ】急性期脳卒中で、症状が軽症~中等症で病巣の小さい程、OHPのADLへの有効性が示唆される。重症で病巣の大きいものは、OHPによるADLの改善は期待できない。